『社会理論研究』第 10 号、社会理論学会、2009 年 11 月、pdf 版

メモランダム労働論
――抽象的人間労働論・再考――

田中 史郎（宮城学院女子大学）

はじめに
1．問題の所在
2．「経済学批判序説」注解
(1) 学説史における「労働」
(2)「労働」発見の意味
3．暫定的結語

はじめに

いわゆる「抽象的人間労働」をどのように理解するかは、経済学にとって重要な課題であることは多言を要しまい。そして、それは単に経済学のみならず、他の社会科学や人文科学においても同様である。哲学でもまた然りである。

日山紀彦の大著『「抽象的人間労働論」の哲学』（お茶の水書房、2006 年）の出版は、そうした文脈からも理解し得る。小生は、本書の書評を公にするとともに[1)]、社会理論学会おいても、それに基づいた報告をする機会を与えられた[2)]。また、この問題にかんしては、かつて自説を明らかにしたことがある[3)]。

本問題にかんしては基本的には自説の変更はないので、ここで、それらをパラフレーズしてもあまり有意義ではない。それゆえ、本稿では、マルクス「経済学批判序説」[4)] 中の「経済学の方法」の一節を吟味することによって、これまでの自説をより豊富化したい。

1. 問題の所在

まず、問題を整理しよう。日山紀彦は、「抽象的人間労働」にかかわる論点を凝縮して示している。それはこれまでの論争から明らかにされてきた論点であり、その限りではよく知られたことではあるが、ここでもそれを取り上げることから始めよう。

「労働」をどのように把握し理解するかは、単純明瞭のようでいて、しかし、必ずしもそうではない。マルクスは、「労働」を二つの側面から把握する方法を提起している。一方が「具体的有用労働」であり、他方が「抽象的人間労働」に他ならない。「商品」が「使用価値」と「価値」という二側面を有しているのに対応して、それを生産する労働も「具体的有用労働」と「抽象的人間労働」とに二重化しているというわけである。これが「労働の二重性」といわれるものである。

以上のような理解は、多くの論者の認める事柄だと思われる。しかし、ここでも、労働

の二重性は、商品のみに固有に表象されるものなのか、それとも、より広く生産物一般にも具現化されるものなのか、いった疑問が直ちにわき起こる。

また、使用価値に体現する具体的有用労働という概念は、理解しやすく、それを巡っての論争は、皆無ではないとしても、多くはない。だが、価値を生み出す抽象的人間労働という概念は、いわゆる労働価値説とも密接に絡まることでもあり、議論は多岐にわたっている。

このような、「抽象的人間労働」にかかわる論争は内外で以前より存在し、必ずしも定説があるわけではない。しかし、この問題にかんしては、宇野弘蔵と廣松渉による主張を無視することはできない。周知のように、宇野の業績は「宇野経済学」、そして廣松のそれは「廣松哲学」という名でしばしば語られることからも、当然であろう。

さて、日山はこうした点を踏まえつつ、抽象的人間労働の理論ないし概念をめぐって三つの論点を明らかにしている。

その第１は、抽象的人間労働が、(α)如何なる時代にも存在する歴史貫通的なカテゴリーなのか、それとも(β)資本主義ないし商品経済という歴史的カテゴリーなのかという問題である。大まかにいえば前者αが宇野説であり、後者βが廣松説である。第２は、抽象的人間労働は、（α）自然的概念か、それとも(β)社会的概念かという点に関するものである。前者αが宇野説、そして後者βが廣松説に他ならない。

そして、この二つは密接に関連している。仮に、抽象的人間労働というものが、歴史貫通的なカテゴリーであれば、それはとりもなおさず、いかなる社会とも無関係な自然的概念ということになろう。しかし、反対に、抽象的人間労働が歴史的カテゴリーであれば、それは、具体的歴史を形成する社会的概念ということになる。つまり、抽象的人間労働イコール歴史貫通的・自然的概念と見るか、それとも、抽象的人間労働イコール歴史的・社会的概念と見るか、これらに見解は二分することになるわけである。いうまでもなく、前者が宇野理論、後者が廣松理論である。

そして、論争の第３は、抽象的人間労働の概念が導出されるのは『資本論』体系ないし経済学原理論体系においてであることには異論はないが、その領域が、（α）生産論なのか、それとも(β)流通論ないし交換過程においてなのかという点である。ここでも、前者αは宇野の主張であり、後者βが廣松の主張である。

以上のように、抽象的人間労働を巡る諸説を、やや強引に図式化して整理してみた。このようにあまりにも単純化して捉えることは、精確ではないが、議論をわかりやすくするには、とりあえず好都合である。ここでは、第１と第２の問題にかんして中心的に考察したい。これらを踏まえて、マルクス「経済学批判序説」における関連する部分のクリティークに移ろう。

2.「経済学批判序説」注解

(1) 学説史における「労働」

マルクスはここで、「労働」という、あまりにもありきたりのカテゴリーが、じつは必ずしもそうではなかったことを示す。

労働はまったく単純な範疇のように見える。このような一般性においての――労働一般としての――労働の観念もまた非常に古いものである。それにもかかわらず、経済学上この単純性において把握された「労働」は、この単純な抽象を生みだす諸関係と同様に、近代的な範疇である。(「序説」298 頁)

「労働」の観念は古いものだが、経済学においてそれが把握されるのは、この労働という関係の成立とともに近代的な範疇だと言う。そして、「労働」が経済学史上どのように捉えられてきたかを簡単に振り返っている。

たとえば、重金主義は、富をまったく客体的に自分の外に貨幣の姿をとっている物として定立した。

マニュファクチュア主義または重商主義は、富の源泉を対象から主体的活動に――商業労働とマニュファクチュア労働に――移したのであり、それは、重金主義に対して大きな進歩だった。といっても、まだこの活動そのものを金儲けという局限された意味でしか把握していないのであるが...。(「序説」298 頁)

経済学史の通説では、広義の重商主義のうち、特に前期のそれを重金主義(bullionism)と呼び、後期の狭義の重商主義と区別する。重金主義とは、経済的な富や価値は金・銀そのものであり、一国の富はその保有によって決定されるという主張である。それは、金銀貨・金銀地金などの輸出を制限・禁止したことで知られる。マルクスはそれを「富をまったく客体的に自分の外に貨幣の姿をとっている物として定立した」と論定している。

続いて重商主義...。重商主義(mercantilism)とは、前期の特許政策、後期の貿易政策などに分けられるが、いずれにしても、金や銀という貨幣の姿をとっている富を増大させる方法に着目する。それは、自国の輸出産業を保護育成し、貿易差額によって国富を増大させようとする経済政策とそのイデオロギーである。マルクスはそれを、「富の源泉を対象から主体的活動に...移したのであり、それは、重金主義に対して大きな進歩だった」と、評価しつつも、他方では、「この活動そのものを金儲けという局限された意味でしか把握していない」と述べ、その限界を示している。こうしてマルクスの分析は重農主義に向かう。

この重商主義にたいして、重農主義は、労働のある一定の形態――農業――を富を創造する労働として定立し、また、対象そのものを、もはや貨幣という仮象でではなく、生産物一般として、労働の一般的結果として定立した。しかし、この生産物を、(富を創る)活動の局限性に対応して、やはりまだ自然的に規定された生産物――農業生産物、とくに土地生産物――として考えていたのである。(「序説」298-9 頁)

重農主義(physiocracy)は、先の重商主義を批判し、富や価値の源泉にはモノ(とりわけ農産物)の生産があると考え、一国の富の源泉は農業にあるとの立場から、自然秩序および農業生産を重視した経済政策ないしそのイデオロギーである。重農主義からすると、商業は単にモノを移動したり販売したりするだけであり、富や価値を増大させるものでは

なく、また同様に、工業も単にモノを加工変形させるのみで、はやりそれを増大させるものではないとされる。こうした重商主義を、マルクスは、「重農主義は、労働...を富を創造する労働として定立し」たと積極的に評価し、だがそれは、「農業生産物」に限定していたという限界を指摘した。そして、その限界を突破するものとしてスミスに代表される古典派経済学をあげる。

> 富を生み出す活動のあらゆる限定を解除したのは、アダム・スミスの巨大な進歩だった。...マニュファクチュア労働でもなく、商業労働でもなく、農業労働でもないが、しかもそのどれでもあるたんなる労働。...この移行がどんなに困難で大きいものであったかは、アダム・スミス自身もまだときどき重農主義に逆もどりしているということからも明らかである。(「序説」299 頁)

経済学、とりわけ経済理論においては価値論は大きな課題である[5)]。つまり、経済的な富や価値とは何であり、どのように生成されるのかが大きな関心事であった。それを価格がどのようにして、どのような水準で決まるのかと、言い直してもよい。

そうした観点からすると、広義の重商主義はそれを流通や交換に求めたといえる。それに対して、重農主義は、価値の源泉に関心をよせ、労働に注目したといえる。しかし、それは農業労働だけに局限化したものであり、一般的意味での労働ではなかったのだ。その限界を突破し新地平を構築したのが、スミスに代表される古典派経済学（classical economics）の労働論であるといえる。いわば「労働」の発見と言ってよい。マルクスは、「商業労働でもなく、農業労働でもないが、しかもそのどれでもあるたんなる労働」と表現し、こうした範疇を定立することの学説史的困難さと、その意義を強調しているわけである。

(2)「労働」発見の意味

以上のように、マルクスは「労働」範疇の形成されてきた歴史を経済学説史のなかに求め、見事に辿って見せた。今日の経済学説史の通説はここに典拠をもっているのである。

こうした学説史的考察を前提に、マルクスはスミスなど古典派経済学によってもたらされた「労働」の発見の意味や意義を掘り下げてゆく。

> ところで、こうした移行だけでは、人間が――どんな社会形態のもとであろうと――生産をするものとして現われる最も簡単で最も古い関係を表わす抽象的な表現が見い出されたにすぎないように思われるかもしれない。これは、一面から見れば正しい。他面から見れば正しくない。(「序説」299 頁)

このような「労働」の発見を、どんな社会においても古くからある関係の表現が見出されたことだけだとも言い、それを「一面から見れば正しい。他面から見れば正しくない。」と述べる。やや謎めいた言いようだが、それは「労働」の存在と認識との関係を吟味することによって明らかになる。

労働の一定の種類に対する無関心は、現実の各種の労働のうちのどれ一つとしてももはや一切を支配する労働ではないというような、非常に発展した労働の総体を前提としている。こうして、最も一般的な抽象は、ある一つのものが多くのものに共通に、全てのものに共通に現われるような、最も豊富な具体的な発展のもとでのみ成立するのである。そのとき、ただ特殊な形態でしか考えられないということはなくなる。(「序説」299-300 頁)

一方で、非常に発展した労働の総体を前提としてはじめて、労働が特殊な形態でしか考えられないということはなくなるという。つまり、労働の種類に対する無関心が生ずるという訳である。こうしたことは、じつはどんな社会においても古くからある関係の表現が見出されたにすぎないともいえる。「これは、一面から見れば正しい」とはそのような意味であろう。しかし、それだけではない。

他方、このような労働一般という抽象は、たんに種々の労働の具体的な総体を精神で考えた結果であるだけではない。特定の労働にたいする無関心は、個々人がたやすく一つの労働から他の労働に移り、彼らにとっては労働の特定の種類は偶然であり、したがって、どうでもよいものになるという社会形態に対応する。

労働は、ここではたんに範疇としてだけではなく現実にも富一般の創造のための手段になっており、職分として特定の個人と結びついたものではなくなっている。

このような状態は、資本主義社会の最も近代的な定在形態――アメリカ合衆国――で最も発展している。ここでは、「労働」、「労働一般」、単なる労働という範疇の抽象が、近代的な経済学の出発点が、はじめて実際に真実になるのである。(「序説」300 頁)

見られるように、「労働」が「労働一般」として認識されるということは、頭の中で考えられた結果ではないという。それは、労働が現実にも富一般の創造のための手段になっており、職分として特定の個人と結びついたものではなくなっているという労働の存在を前提としているというのである。

言うまでもなく、近代資本主義以前においては多かれ少なかれ身分制がしかれ、それが特殊な労働と結びついていたことは、よく知られている。そのように、特定の労働が職分として特定の個人と結びついているような社会が解体した社会において、はじめて、労働一般として「労働」が発見され、抽象的に認識されるというのである。先の「他面から見れば正しくない」とは、このように、単に頭の中で考えられた抽象ではないという意味であろう。そして、その当時においてはアメリカにおいて、もっともそれがよく見られるという。

こうして、マルクスは以下のように結論づけている。

だから、近代的な経済学が先頭に立てている最も簡単な抽象は、そしてすべての社会形態にあてはまる非常に古い関係を表わしている最も簡単な抽象は、それにもかかわらず、最も近代的な社会の範疇としてだけしか実際にも正しいものとしては現われ

ないのである。...。

この労働の例が適切に示しているように、最も抽象的な範疇でさえも、それは――まさにその抽象性のゆえに――どの時代にも妥当するにもかかわらず、このような抽象の規定性そのものにあっては、やはり歴史的諸関係の産物なのであって、ただこの歴史的諸関係だけにたいして、またこの諸関係の中だけで、十分な妥当性をもっているのである。(「序説」300-1 頁)

労働のような、もっとも簡単な範疇は、それがあらゆる歴史・社会に存在するにもかかわらず、そのような抽象性ゆえに、近代的な社会の範疇としてだけしか実際には現われないと言う。

労働はいついかなる時代でも、いついかなる社会でも、日々行われていたはずである。しかし、その労働を、労働一般として理解するには、特殊な時代、特殊な社会、すなわち資本主義を待つしかなかったということであろう。古典派経済学によって発見された「労働」、抽象的・一般的な意味での労働は、一大発見に違いなく経済学の大進歩だが、しかし、それはその時代と社会において、日々そのような労働の抽象化と一般化が行われていたという前提によって導かれたものであるといわざるをえない。

こうして「労働」の発見の意味や意義を明らかにするとともに、このような方法を含意しつつ、マルクスは「人間の解剖は、猿の解剖のための一つの鍵である」(「序説」301 頁)という有名なフレーズを示す。

そして、更に、「それだから、経済学的諸範疇を、それらが歴史的に規定的範疇だった順序にしたがって配列することは、実行もできないし、間違いであろう。むしろ、諸範疇の順序は、...諸範疇の自然的順序として現れるものや歴史的発展の順序に対応するものとは、まさに逆である。」(「序説」304 頁)と、述べている。

マルクスのテキスト・クリティークは以上である。これらを通して、次のような暫定的な結論を示すことが出来よう。

3. 暫定的結語

以上の検討をとおして、経済学説史における労働の発見とその意味や意義が明らかになった。そして、またその過程で方法論的な問題に関しても含蓄に富む示唆がなされていることが示されたであろう。

さてそこで...、ここで主題的に取り上げられている「労働」を、いわゆる「労働の二重性」論の「抽象的人間労働」と考えることが出来るのでないかと思われる。これまで「労働」と示された部分に、すべて「抽象的人間労働」を代入してみればよい。そのようなことが可能であるならば、冒頭で課題とした、「抽象的人間労働」にかんする、宇野と廣松の理解をある意味で統一的に理解できものと思われる。すなわち、抽象的人間労働を歴史貫通的・自然的概念と見るか、それとも、抽象的人間労働を歴史的・社会的概念と見るか、これらに二分する見解をつなぐ論理を示すことができのではなかろうか。彼らの二項対立的な議論を超える道が拓かれるのである。

具体的に示そう。マルクスが「労働」を巡って述べたように、それを「抽象的人間労働」

と置き換えると、次のようになる。すなわち、いつかいなる時代や社会においても「抽象的人間労働」は存在しているといえる（あえて言えば宇野説的）。しかし、それが明らかになるのは、近代資本主義においてである（あえて言えば廣松説的）、と。

すでに明らかなように、資本主義以前においては、身分制を前提として労働は特定の個人と結びついたものであり、労働の抽象化ないし抽象的労働という概念は成立していない。それに対して、近代資本主義においては、ある労働者が実際に様々な業種の様々な職種に携わることは日常的に行われている。これをマルクスは「労働の一定の種類に対する無関心」と表現したが、そのようなことは、近代において成立することである。したがって、そのような現実を前提としてはじめて、労働の抽象化、あるいは抽象的人間労働という範疇が成立することになるといえる。

このように理解できるとすると、「抽象的人間労働」とは、近代資本主義においてはじめて成立する歴史的・社会的概念であるといえる。しかし、それは、近代以前の労働を考察する際にも基準となる概念であり、その意味で歴史貫通的・自然的概念として拡張して考えることが可能である。

つまり、「抽象的人間労働」といった概念は、いわばもっとも純化した状態のなかで構築されるが、しかし、それはそれ以外の時間（歴史）や空間（社会）でも否定できない[6)]。「抽象的人間労働」を巡る論争をこのように理解できるのではなかろうか。

1）田中史郎、書評「日山紀彦『「抽象的人間労働論」の哲学』を読む」、『東京成徳大学人文学部研究紀要』第 10 号、東京成徳大学、2008 年 3 月

2）田中史郎、「抽象的人間労働を考える－日山紀彦『「抽象的人間労働論」の哲学』」をめぐって－」（社会理論学会月例研究会、第 79 回、2009 年 2 月 7 日）

3）田中史郎、「抽象的人間労働」、『東経大論叢』東京経済大学大学院、第 4 号、1983 年

4）ここで「経済学批判序説」における関連する部分とは、その「3　経済学の方法」の一部を指す。周知のように、これは 1857-58 年の「ノート」からのもので当時は公刊されていないが、しかしそこでは、マルクスの方法が直接に表現されてもいる。なお、引用においては、杉本俊朗訳『経済学批判』大月文庫版を用い、「序説」と略記してページ数を示す。マルクス『経済学批判』大月書店、1953 年。ただし訳文　は必ずしもそれにしたがっていない。

5）経済理論ないし理論経済学においては、本文で示したような「価値」の問題に並んで「市場」の問題が大問題だといってよい。つまり、経済理論は、「価値」と「市場」とを巡って、議論を展開してきたわけである。そのように整理できるとすると、価値を流通や交換に求めるか、それを生産や労働に求めるかによって理論的立場は大別される。また、市場を安定的なものと見なすか、それを不安定なものと見なすかによっての立場は分かれる。そのように、価値と市場という二つの対立軸において、何れの立場を堅持するかによって都合、四つ学説が考えられる。すなわち、①価値を生産や労働に求め、市場を安定的なものと見なす古典派経済学、②価値を生産や労働に求める点では古典派とほぼ同様であるが、その市場観においては大きく異なるマルクス経済学、③価値を、古典派とは反対に、流通や交換に求め、しかし、市場観においては古典派を継承する新古典派経済学、そして、④価値の問題に関しては新古典派を引き継ぎつつ、しかし、市場観に関してはむしろマルクスに近い立場をとるケインズ経済学、という、四つの経済学はこのようにして成立しているといえる。

6）こうした方法を、宇野弘蔵にならって「方法的縮図論」と呼ぼう。これに関しては、別稿を準備している。